住みよいたけし

住みよい武石をつくる会広報　第45号
2024年10月16日発行
事務所　武石地域総合センター内
TEL:0268-85-2511
https://www.s-takeshi.jp
印　刷　中澤印刷株式会社

第8回 仮装大賞

出演者、審査員、風土つなぎ隊・
滝沢総監督・長野大学生などスタッフの皆さん

すっかり恒例となった武石風土つなぎ隊が主催する仮装大賞が今年も9月15日（日）に武石地域総合センターで開かれ、11組の皆さんが熱演しました。地域のユニークなイベントは今年もテレビや新聞で注目、紹介されて地区内外から200名の皆さんが訪れました。

今年は武石地域からは3組が出場したほか、テレビの欽ちゃんの仮装大賞に何度も出場された皆さんや、また遠く宮城、東京、山梨、岐阜など県外からも５組が駆け付け奇想天外な“仮装”を披露しました。

優勝は武石地域の7名で構成する「チーム♡だから、どした？」。桃太郎か浦島太郎かストーリーははちゃめちゃですが地域人材の力を結集した演技で見事優勝しました(右写真)。

５ページに準優勝以下の全出場作品のカットを掲載しています。

優勝

「昔々　それからどした？」
桃太郎？浦島？　玉手箱から赤ちゃん？

お知らせ　お味噌販売　11月2日（土）午前中「武石おさんぽギャラリー会場」にて　きてね!

武石小学校４年和組の皆さんが、地域の方の力を借りて作った味噌の販売をおこないます。
子どもたちによる楽しいパフォーマンスや、お味噌、松茸ちゃんグッズ販売などなど！
多くの方のお越しをお待ちしています。

＊問い合わせ＊　武石小学校TEL 85-2013

すまいるきっちん 子ども食堂

8月10日（土）、下武石のつなぐ家で子ども食堂が行われ、家族を含め10人余が利用しました。

ラーメンショップかじかやの児玉篤人さんが中心となって行っている子ども食堂、8月はつなぐ家を会場としました。長野大学生3人の応援を得て焼きそばを提供し、デザートにはチョコクランチも付きました。

この日は予約を取りませんでしたが、子ども食堂は通常は予約が必要で、毎月第2週金曜日の夕方にかじかやで行われています。

夏祭りに出店
つくる会産業経済・ふれあい交流部会

今年の夏祭りは昨年に引き続き武石体育館駐車場を会場に開催されました。

つくる会のテントでは、産業経済部会が親子農業体験事業として育てたジャガイモとトウモロコシを使って、じゃがバター200個・焼トウモロコシ100本を販売し祭りを盛り上げました。両方とも甘いと好評で、祭りたけなわのころには売り切れとなってしまいました。

練馬区・上田市（旧武石村）
友好提携30周年記念親子バスツアー事業が開催

8月24日（土）、練馬区では旧武石村と友好提携を結んで30年となるのを記念して親子バスツアーを行い、上本入の少年自然の家周辺で自然体験イベントが行われました。武石からもつくる会役員なども参加し交流しました。

練馬区ではツアー40名の定員に対し20倍の応募があったとのこと。土屋市長の歓迎のあいさつなど開会式の後、木の伐採を体験・見学し、その後大人と子どものグループに分かれ、子どもたちは青竹クーヘンづくりを行いました。

真田町のやまぼうし自然学校の皆さんの指導により、小麦粉を水に溶いて味付けした生地を青竹に塗り付け、炭火にかざして焼くことを数回繰り返し、2時間ほどで香ばしいクーヘンが出来上がりました。

大人の皆さんは巣栗峡周辺で森林浴を楽しみました。植物の説明やリラックス体操は練馬区で活動している”coもれび”の皆さんが指導しました。練馬区の皆さんは、翌日稲倉の棚田や上田城を見学しました。

練馬区少年自然の家は1980（昭和55）年に本館が完成し、小中学生の自然教室・スキー教室が始まりました。1994年にホテル形式の新館が誕生し、これを機に練馬区と武石村の友好提携が締結されました。上田市の皆さんの施設利用には割引のサービスがあります。ご利用してみてはいかがでしょうか。

〈お詫びと訂正〉 8月発行の会報44号1頁で、「村澤夏望（かのん）」さんのお名前の表記が間違っていました。お詫びして訂正いたします。

防災講演会

9月21日（土）、武石自治会連合会、武石地域協議会、つくる会が主催する防災講演会が、武石地域総合センターホールで開催され、約70人の皆さんが聴講しました。

「3Dで見る武石地域の災害リスク」と題して秋田大学・宇都宮大学地質工学非常勤講師の宇津木慎司氏が講演し、立体画像のハザードマップを使い、武石地域の地形や地質の特徴から想定される災害リスクを、市が発行している災害ハザードマップと重ね合わせながら解説をされました。

減災・防災のポイントなどのお話がありました。

① 地域のどこに、どんな災害リスクがあるかを知る。	➡ 上田市災害ハザードマップで確認
② 今発生中の災害（豪雨、洪水など）の危険度を知る。	➡ リアルタイム配信の防災情報を確認（国交省「川の防災情報」、上田市「防災気象情報」など、パソコン・携帯でも確認可能）
③ 「今まで（50年間）大丈夫だった」を過信しない。	➡ 平時から災害リスクを知り、備えることが大切

美ヶ原で太極拳

9月8日（日）つくる会健康福祉体育部会では昨年に続き2回目となる美ヶ原高原で太極拳の体験イベントを開催しました。

今回も武石太極拳同好会の矢嶋榮子さんに指導をいただきました。初めて参加した方からは、「壮大な草原の中で秋の高原の空気を胸いっぱいに吸って気持ちのいい運動を体験できた」との声が聞かれました。

火の見櫓・水防庫　“ありがとう/さよなら”セレモニー

9月8日（日）、上武石地区で「火の見櫓・水防庫“ありがとう/さよなら”セレモニー」が行われました。

消防分団の統合にともない上田市では火の見櫓の解体取り壊しが進められていますが、この度堀之内にある火の見櫓が解体されることになったことから、上武石区（片羽、堀之内、市之瀬自治会）では櫓に隣接する旧水防庫についても解体することとしました。長い間防災の拠点だったことに感謝し今回のセレモニーとなりました。

火の見櫓は昭和30年代に建造されました。水防庫には腕用ポンプと2枚の大判の厚紙が残っていて「明治十五年に沖村、鳥屋村、下武石村、上武石村、下本入村、上本入村、小沢根村、余里村に消防組がつくられました」、「明治二十七年三月に余里地区に新しくとり入れられた腕用ポンプ」と書かれています。また、ポンプには「余里區」と表記があり、その後上武石区に転用配備されたものと思われ、水防庫は明治中期に建設されたものと考えられます。水防庫は籾蔵（もみぐら）として地区の農作の要の役割も担っていたと推測されます。また、450冊もの書籍類もみつかり、これらは郷土史研究者の児玉卓文さんに託されて調査が進められています。

式には、小相澤上田市副市長など来賓のほか20人余りの区民が出席し、武石西部分団の皆さんによるラッパ吹奏に続いて最後の半鐘、一点四点（●　●-●-●-●、火災警報発令信号）の音が地域に響きました。ポンプは武石地域総合センターに収められ文化財として展示公開されています。

戦争を語り継ぐお話しの会

この夏日本は敗戦から79年、来年は80年という節目の年を迎えます。人の一生にもあたる長い時間の経過とともに、かつての戦争を自分の体験として語れる人が少なくなっています。つくる会子育て教育文化部会（芹澤文子部会長）では、8月27日武石地域総合センターで終戦当時10～15歳だった地域の方にその当時のお話を聴く会を開催しました。

樋沢こうさん（95歳・下武石）のお話

- 妻と乳飲み子、二人の老親を残して叔父が出征したことに涙が止らなかった。その叔父の弟はビルマで戦死し、母が大声で泣いた。
- 小諸の軍需工場で働いていたとき終戦の玉音放送を聞いた。暑い日だった。
- 終戦後25歳で武石に嫁ぎ、夫からシベリアに5年間抑留された時の体験を聴いた。
  重労働と寒さと空腹で、日本に残した家族を心配しながら、仲間が次々と命を落としていった。明けても暮れても凍土の上で木を燃やし、氷を溶かして穴を掘り仲間の遺体を埋葬した。
- 「同級生2人が戦死した」と後に話を聞いた。戦死した同級生は16～17歳で今でいえば、高校生の歳だった。

野村亮さん（92歳・下武石）のお話

- 青年学校ではグラウンドに防空壕を掘った（実際には使われることはなかった）。
- 武石川の中州でさつま芋を作った。増水した川にロープを張って危険を冒して渡たり収穫した。
- 食べ物がなく、イタドリ・スイコンボウなどの草も食べた。
- 勤労奉仕で塩田にも行った。
- 学校で希望を聞かれ海軍や特攻隊を志願したが、程なく終戦となり行くことはなかった。
- 終戦後進駐軍が学校にやって来て軍事訓練に使っていた銃（50丁ほどあった）を回収していった。それを遠くから見て情けなく感じた。

上原千枝子さん（故人・上本入）から生前（当時89歳）お聴きしたお話

- 現在の長和町古町に家があったが、終戦の日の昭和20年8月15日午前6時50分、隣家に焼夷弾が投下された。その家では、疎開先の家を見学に来ていた４人が犠牲になった。

奥村森代さん（92歳・鳥屋）のお話

- 戦争当時は武石の青年学校に通っており、河原の畑で作ったさつま芋と手作りのわら草履を担いで背丈ほどもある草をかき分け、熊沢峠を越えて霊泉寺温泉の旅館に親元を離れ学童疎開していた生徒達に届けた。後日東京からお礼の手紙が届いた。
- 授業では、女子は長刀、男子は竹槍で軍事訓練を行った。余里に植林にも行った。
- 終戦の時は、叔母と鳥屋公民館の桜の下で抱き合って泣いた。

体験談の後、上本入の鶴岡俊恵さんによる紙芝居の読み聞かせがありました。日本の敗戦を信じられずグアム島のジャングルに隠れ住み、カエルやネズミ、でんでん虫等何でも食べ、28年間生き延びて日本に戻ってきた横井庄一さんの波瀾万丈の生涯の紙芝居です。横井さんも戦争の犠牲者です。

世界では、戦争や紛争が今も絶えることがありません。犠牲になっている人の多くは、戦争に直接関係の無い一般市民です。

今、日本が置かれた状況を新たな戦前と呼ぶ人もいます。再び戦争を語り継ぐ人を出さないために、平和を願いながらアンテナを高くしていく必要を強く感じた時間となりました。

第8回 仮装大賞

準優勝

「ハッピーバースデー」
ローソク吹いて人も吹っ飛ぶ!! ？

3位

「ハンド」
武石の宝とっちゃダメ！
手が噛まれるよ

「できた!」
逆立ち？これなら
私もできそう

武石郵便局長賞

「武石の名所巡り」
自治センター職員も一所懸命PR

「これなんのくり」
やりくり、へそくり、
がっくり、そっくり・・・etc

「仕事終わりの一杯！」
武石の皆さんお疲れ生です

「巣栗渓谷」
らしく見えます　か？

「今年の新ネタ」
1週間前に予言的中!!

「スケボー」
オリンピック種目でした。ソバ食べてる？

「逃げろ」
細かく丁寧に作られているのはわかるんですが！

第27回 たけし歴史さんぽ道

小沢根の聖観音像に関連して

郷土史家 児玉卓文

観音堂の西側に並べられた石幢（せきどう）の残欠や石仏の中に、「鼠大権現」と刻まれた取り柄のない高さ40cmほどの河原石があります。これはネズミを神様として祀るもので、石仏辞典や民俗の辞典を調べてみましたが例がありません。とても珍しい石塔です。

ネズミは人家に害を与えるので憎まれていたのですが、都市化が進行した江戸時代には吉祥（きっしょう）の象徴とされペットにもなりました。

ネズミは概ね１年に４～６回、１回に４～７匹の子供を産む抜群の繁殖力と劣悪な環境でも逞しく生きるため、子孫繁栄・商売繁盛・家運興隆の象徴とされました。『古事記』で大国主命（おおくにぬしのみこと）の苦難をネズミが助けたとの昔話から、大国（＝大黒）の使者として大黒信仰に結び付いたとも言われます。江戸中期には、女性の下半身の象徴として二股大根が描かれ、それをネズミがかじるという画像が流行ったこともあります。夫婦和合･縁結び･子孫繁栄をしめすお目出たい絵です。

安永７年（1787）に、『珍翫鼠育艸（ちんがんそだてぐさ）』という本が出版されました。序文には「ネズミが集まる時は、その家に近々良いことがある」、火事や地震の前に逃げたりするから、ネズミは「遠くで起きた事柄についても知っている」などと書かれ、本文の最初には、「ぶち」「ふじ」「黒目の白」「目赤の白」など様々なネズミが列挙され、飼育箱の使い方や餌などの飼育方法、様々なネズミをかけ合わせて奇品を生み出す実験方法などが書かれています。江戸時代の好奇心は、メンデル（1822～84）の法則が発見される前にここまで来ていました。

ネズミは１年かければ６～７代の親子関係を追え、多産であるので出現確立の低い突然変異体（ミュータント）も手に入りやすく、生まれた子供の毛色や形態なども見た眼で区別しやすく、寿命は２年ほどで世代交代が早いので、現在でも、生物学・医学・遺伝学で欠かせない実験動物です。

「鼠大権現」の文字に並んで、「耕雲」という文字が刻まれています。観音堂背後の無縫塔に「頂山耕雲和尚」と刻まれたものがあるので、善能庵の和尚と思われます。観音堂前の道沿いに、何の変哲もない高さ60cmほどの川原石の文字道祖神があり、裏に「施主　耕雲」とあります。耕雲和尚は信廣寺で仏道に勤めた後この庵に退き、村人の民俗的な習俗に寄り添った日々を送ったユニークなお坊さんだったように思われますが、残念なことに江戸時代の何時の人かは分かりません。

観音堂の前に石灯篭が一対あります。建てられたのはペリーが来航する９か月前の嘉永５年（1852）９月です。小沢根の豊田小右衛門さんと豊田要蔵さんが世話人となり、小沢根ばかりでなく下武石・上武石・上本入それぞれ１名、余里２名に信廣寺さん・神主さんを加え、計40名の寄進により建てられました。一般に江戸時代の農民は名字を名乗ることを許されなかったとされていますが、皆が名字と名を刻んでいます。

高さ193㎝の石灯篭は観音堂のたたずまいを引き立てていますが、観音堂に献納したものではありません。竿（さお）部分に「秋葉山」とあるので、赤石山脈の南端を占める秋葉山をご神体と仰ぐ、火の神様すなわち鎮火の神様の秋葉神社に奉納したものです。もちろん遠い静岡県の本社に奉納したのではなく、秋葉神社は背後の中山城の本丸に石の祠で祀られています。

石の祠は右に「明和４年（1767）２月28日に、信廣寺19世の元柱を中心として郷中で秋葉の神を勧請（かんじょう）した」、左に「天明３年（1783）９月17日に、小沢根村中で再建した」、裏に「別当　武石山信廣寺廿世元廣代」と刻まれています。

明和の勧請は木造の社になされ、朽ちたため天明期に石の祠に替えたのでしょう。勧請を「郷中」すなわち武石村中でし、神社なのに信廣寺のお坊さんが中心になり、中山城の本丸を選んで社地としていることに、何か歴史的な意味がありそうに思えます。